

ハリエット・マーティノー『自伝』研究：自伝執筆を義務と感じていた幼少期の記述について

著者	齋藤 九一
著者別名	Kuichi Saito
雑誌名	白山英米文学
号	39
ページ	97-106
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00006612/

ハリエット・マーティノー『自伝』研究： 自伝執筆を義務と感じていた 幼少期の記述について

齋 藤 九 一

1

ハリエット・マーティノー (Harriet Martineau, 1802-1876) の『自伝』(*Harriet Martineau's Autobiography*, 1877) の序論 (Introduction) は次のような言葉で始まる。

From my youth upwards I have felt that it was one of the duties of my life to write my autobiography. I have always enjoyed, and derived profit from, reading that of other persons, from the most meagre to the fullest: and certain qualities of my own mind—a strong consciousness and a clear memory in regard to my early feelings—have seemed to indicate to me the duty of recording my own experience. (1)

マーティノーが実際に自伝を書いたのは53歳の時であり、彼女ほどに業績をあげた人物が自伝を書くことに何の疑問もありえないが、ここで注目したいのは、冒頭の一句、「若い時から (from my youth upwards)」である。まだ何の業績もあげていない、そもそも自分が何者であるかもわからないであろう幼少期に、早くも自伝を書くことを「義務」の一つと感じていたとすれば、それは驚くべきことではないだろうか。

自伝というものの執筆には何らかの弁明が必要らしい。例えば、マーティノーより4歳下のジョン・ステュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-1873) は『自伝』(*Autobiography*, 1873) 第1章を次のように書き出している。

It seems proper that I should prefix to the following biographical sketch, some mention of the reasons which have made me think it desirable that I should

leave behind me such a memorial of so uneventful a life as mine. (Mill 25)

「これといった事件もなかった一生」について自伝を書くことには何らかの弁解が必要であるというミルの謙遜は、マーティノーより 13 歳下のアントニー・トロロプ (Anthony Trollope, 1815-1882) にも共有されていたようだ。トロロプは『自伝』(*An Autobiography*, 1883) の冒頭で次のように書いている。

In writing these pages, which, for the want of a better name, I shall be fain to call the autobiography of so insignificant a person as myself, it will not be so much my intention to speak of the little details of my private life, as of what I, and perhaps others round me, have done in literature. . . . (Trollope 1)

これを書いたのはトロロプが 60 歳を過ぎた頃と思われるが、彼ほどの小説家にしても、「自分のようにつまらない人間」が自伝を書くのはおこがましいというような口ぶりであり、また、個人的な生活の細部よりも文学といういわば公的な世界で自分が成したことについて、その成功や失敗の原因を語ることに重点を置く意図が述べられている。

それと比較すれば、マーティノーは、「自分の感情に関する強い意識と明確な記憶」、すなわち自分の精神のある特質を意識したがゆえに、若い時から自伝を書かなければならないと思いつめていたというのは興味深い。もちろん、マーティノーが実際に『自伝』を書いたのは 53 歳頃であり、その『自伝』には、社会学者としての公的な、そしてきらびやかな、業績の背景がたっぷり語られているのだから、結果的にはミルやトロロプとそれほど違うわけでもないかもしれない。しかし、「若い時から」自伝執筆の義務感を抱いていたというのは、そのような成人以降の業績の顕示とはまた別のことであろう。

「若い時 (youth)」という言葉でマーティノーが厳密に何歳までを意味していたのか不明であり、20 歳くらいまでとみなしてよいかもしれないが、本稿では 17 歳前後までを考察の対象としたい。それというのも、17 歳の時点に区切りを置くことはマーティノー自身が想定していたように思われるからである。すなわち、マーティノーの『自伝』は、大きく 6 つの「時期 (Period)」に分かれているが、第 1 期 (First Period: To Eight Years Old) に続く第 2 期 (Second Period: To the Age of Seventeen) は 17 歳を目の前にした 1818 年までとなっている。そして、第 3 期 (Third Period: To the Age of Thirty) の冒頭で、マーティノーは、この第 3 期が成人した女性 (womanhood) として自立に向かう時期であっ

たと述べている (97)。これを踏まえて、本稿では『自伝』の第1期と第2期をマーティノーの「若い時 (youth)」とみなして精読を行い、そこに述べられている内容およびその記述の構成について考察する。

2

さて、マーティノー『自伝』第1期第1節 (Section I) は次のような幼時の記憶の興味深い記述で始まる。

My first recollections are of some infantine impressions which were in abeyance for a long course of years, and then revived in an inexplicable way—as by a flash of lightning over a far horizon in the night. There is no doubt of the genuineness of the remembrance, as the facts could not have been told me by any one else. I remember standing on the threshold of a cottage, holding fast by the doorpost, and putting my foot down, in repeated attempts to reach the ground. (9)

ここで「小さな家」(a cottage)と言われているのは、ノーフォーク州ノリッジ (Norwich) の生家ではない。本文の直前に生家の口絵 (“House in Which Harriet Martineau Was Born”) が掲げられているので紛らわしいが、引用文中の小さな家はマーティノーが幼時に里子に出された家 (“a cottage, or small farm-house at Carleton, where I was sent for my health, being a delicate child” 10) であり、世話をしてくれた人の名前、宗教、そして当時のマーティノーの年齢が、少し後の段落で記されている。

My hostess and nurse at the above-mentioned cottage was a Mrs. Merton, who was, as was her husband, a Methodist or melancholy Calvinist of some sort. The family story about me was that I came home the absurdest little preacher of my years (between two and three) that ever was. (11-12)

マーティノーは、他人の家の玄関の敷居に立ち、おそろおそろ地面に足を下ろそうとする幼い子供の姿で『自伝』を始めている。しかも、それは誰かに後年教えられた事実ではなく、まぎれもなく自己の記憶であり、「夜の遠い地平線の上の電光の閃き」のように、長い眠りから鮮やかに蘇った記憶というわけ

である。記憶の復活方法と記憶の内容の両面において、言い換えれば、自らの意志とは関係なく記憶が自然に回復したことを描く比喩的表現と、自らの意志によって地に足を付けようとする幼子のイメージの象徴性と、その両面において、これはかなり文学的な一節であると言えよう。それらがやや月並みな比喩と象徴であることは否めないにしても、マーティノー『自伝』の冒頭の文章は、読者がこの『自伝』から単に事実を読みとれば足りるのではないことを暗示している。すなわち、マーティノー『自伝』は読者に一定の文学的な精読を要求しているのである。

マーティノー『自伝』は、この「小さな家」での2歳頃の歩行の記憶に続いて、段落を改めることもなく一気に、誕生後数週間および3カ月の頃に言及する。ここには記述の上での時間の逆転がみられる。

My mother's account of things was that I was all but starved to death in the first weeks of my life—the wet nurse being very poor, and holding on to her good place after her milk was going or gone. The discovery was made when I was three months old, and when I was fast sinking under diarrhoea. My bad health during my whole childhood and youth, and even my deafness, was always ascribed by my mother to this. (10)

この乳母の名前が書かれていないのは、「小さな家」の女主人の名前が書かれているのと対比的であり、しかも、記述の時間を逆転させ、2歳頃のことをまず書き、それから生後数週間のことを書いている。すなわち、自らの幼時に関する母の話 (“my mother's account of things”) と、自分の記憶 (“my first recollections”) を対比的関係に置くとともに、時間的には後に位置する自らの記憶を、テキストの上では、母のそれに先行させていることになる。これはさげない自己主張なのかもしれない。

母親に代表されるマーティノーの家族が特にしつけに厳しい人々だったとも思われえないが、たとえ当時として世間並みの子供の扱い方であったとしても、当の子供としては、特にマーティノーのように感受性の強い子供の場合は、成長過程の様々な局面において、自分が理解されていないと受け止めたことは十分に考えられる。そのことを物語るのは、第1期第1節の記述にちりばめられた幼少時の不安や恐怖についての言及である。悪夢、人見知り、錯覚、色彩に対する過敏さ、等々、一言でいえば幼時のマーティノーの感受性の強さが提示されている。その感受性の強さが、生きる喜びよりも苦しさを

もたらしたようで、そのことが家族に理解されないために、子供ながらに自殺を考えたこともあり(18)、ややおだやかな反抗形態として家出を考えもしたらしい(19)。この感受性の強い子供が求めたのは「公正(公平)」(justice)であり、“I had a devouring passion for justice—first to my own precious self, and then to other oppressed people.”(18)と言っている。言い換えれば、“the justice due from the stronger to the weaker” (21)を求めていたのであるが、その裏には、自分の能力が家族から正当に理解されないという思いがあった。そのことをマーティノーは、“the family impression of my abilities—that I was a dull, unobservant, slow, awkward child” (23)と表現している。この「公正」(justice)を希求する子供の姿の中に後年の社会学者の遠い予兆を感じ取ることができるように私には思われる。

次に、マーティノー『自伝』第1期第2節(Section II)では、記憶に残るニューカッスルへの旅(“the memorable Newcastle journey” 28)が描かれている。母方の祖父の家へ行っただのである。「カールトンの小さな家」と同様に、これもまた自宅ではない場所である。その意味で、第1期の記述は、里子に出された家での経験という小さな旅(第1節)で始まり、母や兄弟姉妹たちとのニューカッスルへの大きな旅(第2節)で終わるという円環を描いていると読める。この円環がさらに反復されることについては本稿の最後で触れたいと思う。

さて、ニューカッスルへの旅がもたらした効果として、マーティノーは、“I date from it my becoming what is commonly called ‘a responsible being.’” (28)、および、“The best event was that my theological life began to take form.” (32)と言っているが、その中で注目したいのはMilton訳の讃美歌(hymn)を習ったことである。これは“Let us with a gladsome mind / Praise the lord, for he is kind / For his mercies ay endure, / Ever faithful, ever sure.” (Milton 7-10)で始まる全96行の詩編(Psalms) 136の翻訳で、ミルトン15歳の作らしい。この後マーティノーは、*Paradise Lost*との出会い(42)を経て、結果として“a sort of walking Concordance of Milton and Shakespeare” (71-2)と自らを呼ぶまでに熱中するのであるから、若きミルトン作の讃美歌との出会いはマーティノー『自伝』における注目すべき文学的出来事と言えよう。

3

マーティノー『自伝』の第2期は3つの節(Section)に分かれているのだ

が、その最初の節はなぜか Section I の文字がないままに書き出されている。マーティノーは当時を振り返り、“My mind . . . was desperately methodical.” (35) と言い、その例示として、若き日のベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin, 1706-1790) のように、日々の善行と悪行を表の形で書き記すことを試みたが、困難さゆえに放棄したと言っている。フランクリン『自伝』の出版事情について *The Oxford Companion to English Literature* は、“[Franklin's] *Autobiography* . . . was published in England in 1793 (translated from the French), in America in 1818.” (372) と記述している。1802 年生まれのマーティノーがフランクリン『自伝』を読んだ時期は明示されていないが、本稿で扱っている 17 歳前後までの若い時に、英国版あるいは米国版で、読むことは可能であった。マーティノー『自伝』序論の冒頭で、いつも他者の自伝を読むことが楽しみだったと言っているが、その中に当然フランクリン『自伝』も含まれていたであろうと思われる。

自伝のなかで他者の自伝に言及するというインターテクスチュアルな身振りから連想されるのは、マーティノー『自伝』と他の文学作品との関係であるが、ここで深く立ち入る余裕はない。ただ、本稿ですでに言及したジョン・ミルトンのテキストが重要性を帯びていることは次の引用からも推測できる。

When I was seven years old,—the winter after our return from Newcastle,—I was kept from chapel one Sunday afternoon by some ailment or other. When the house door closed behind the chapel-goers, I looked at the books on the table. The ugliest-looking of them was turned down open; and my turning it up was one of the leading incidents of my life. That plain, clumsy, calf-bound volume was “Paradise Lost”; and the common bluish paper, with its old-fashioned type, became as a scroll out of heaven to me. (42)

これほどまでにミルトンに親炙したのであれば、マーティノーが自らの聴覚障害の発現に触れる際に、ミルトンの有名なソネット 16 番 “When I consider how my light is spent / Ere half my days, in this dark world and wide” に言及しないのは不思議であるが、そのような文学趣味よりも、現実の世界で、障害に苦しむ友人への共感を語るのがマーティノーの流儀のようであり、近所の親しい家の同年輩の女の子が障害のために片足を手術で失ったというエピソード (45-48) が読者に強い印象を残す。

また、マーティノーが 9 歳の時に、妹が生まれ、大きな関心と愛着を抱くこ

とになるのだが、知り合いの女性にマーティノーが語ったその関心の理由が驚くべきものである。すなわち、マーティノーは、“... I should now see the growth of a human mind from the very beginning.” (52) と知り合いの女性に言い、9歳の子供には異例の言葉として人々の話題になったのである。それほどに好奇心が強かった (“My curiosity was intense.” 52) と言うのだが、単なる好奇心というだけではなく、自分より弱いものに対して、おそらく自分の成長過程との対比で、大きな関心を持ったのであろう。妹の誕生に際して9歳のマーティノーが口にした “the growth of a human mind (from the very beginning)” は、マーティノー自身の “the growth of a human mind” への関心と並行関係にあり、彼女が『自伝』を書く動機と重なるものであろう。

4

『自伝』第2期第2節 (Section II) は、“I was eleven when that delectable schooling began which I always recur to with clear satisfaction and pleasure.” (61) という書き出しで、Mr. Perry's school での実りある学習が描かれる。ラテン語、フランス語、算数、作文など、どれも楽しかったが、とりわけ作文に関する訓練が有益だったようで、マーティノーは次のように書いている。

Composition was my favourite exercise; and I got credit by my themes, I believe. Mr. Perry told me so, in 1834, when I had just completed the publication of my Political Economy Tales, and when I had the pleasure of making my acknowledgements to him as my master in composition, and probably the cause of my mind being turned so decidedly in that direction. (65)

つまり、学校での「作文」が後年の文筆業での成功の基礎となったわけで、これほど幸福な学校教育はないと言えるだろう。もっとも、ペリー氏の指導下での勉強も2年間で終わることになる。優れた教師でありながら経営の才がなかったペリー氏は経営難で学校をやめることになったからである (69)。

このような幼い子供なりの「知的生活」 (“an intellectual life” 65) の楽しみに交差するように、マーティノー『自伝』の重要テーマである deafness が提示されるが、その提示の仕方には微妙な、行きつ戻りつするリズムが感じられると私には思われる。

まず、“The great calamity of my deafness was now opening upon me.” (70) という言葉で切りだすのだが、ここで一気にその話題に深入りするのではない。難聴以外にも当時、慢性的消化不良、疲労、筋力低下 (“the constant indigestion, languor, muscular weakness” 70) の兆候があったと述べることによって、ある意味で、聴覚障害だけを際立たせるのではなく、他の健康上の障害と並列に置く。このような予備的な言及を行った上で、そのような複合的な体調不良を慰めるものとしての宗教、本、音楽に話題を移し、とりわけ、Shakespeare を読むこと、および、新聞を読む楽しみを覚えたことに触れる。

新聞を読むことによって知らず知らずに Political Economy に関心を持つようになったのは、後年の文筆活動にとって有益であったのは言うまでもないだろうし、それと同時に、“a sort of walking Concordance of Milton and Shakespeare” (72) と言えるほどにミルトンとシェイクスピアを読んだことは非常に有意義な知的蓄積であったはずである。このようなプラス要因の記述で少し遠回りした後で、いよいよ核心に触れる記述が来る。

The first distinct recognition of my being deaf, more or less, was when I was at Mr. Perry's,—when I was about twelve years old. It was a very slight, scarcely-perceptible hardness of hearing at that time . . . (72)

しかし、その後の聴覚障害の進行について、マーティノーは、“... before I was sixteen, it had become very noticeable, very inconvenient, and excessively painful to myself.” (72) と書いた段階で、突然、『自伝』の叙述の上で非常に大胆な「省略」の選択を行うのである。

I did once think of writing down the whole dreary story of the loss of a main sense, like hearing; and I would not now shrink from inflicting the pain of it on others, and on myself, if any adequate benefit could be obtained by it. But, really, I do not see that there could. . . I will therefore offer no elaborate description of the daily and hourly trials which attend the gradual exclusion from the world of sound. (72-3)

障害について詳細を語っても本当の意味での同情が得られるわけではなく、また実際の効用があるわけでもないのが、書かないというわけである。そのうえで、前向きに deaf child の教育について “some suggestions and conclusions” (73)

だけを提示すると言い、かなりのスペースにわたって、障害を持つ者の一人として幾つもの実践的な提案をしている。このような提案もまた、マーティノーが『自伝』を書くことの意義の一つとなっていただろう。それにしても、『自伝』において、自らの最大の苦しみの存在を明言しつつも、読者に苦痛を与えるだけと思われる描写はしないと決断して、日々の苦勞に満ちた細部は大胆にカットしてみせるマーティノーの強さ（と言ってよいと思うのだが）は実に興味深いと私には思われる。

5

第2期第3節 (Section III) では16歳の時にブリストル (Bristol) の叔母と娘たちが経営する寄宿学校に1年余り滞在したことが書かれている。主として健康上の理由での転地だが、理由はそれだけではなかった。マーティノーが「家族からの批評」 (“domestic criticism” 83) に言及し、さらには、“I was too shy ever to ask to be taught anything,—except, indeed, of good-natured strangers.” (83) と言っているように、“... never was poor creature more dismally awkward than I was when domestic eyes were upon me; and this made me a most vexatious member of the family.” (84) というような家庭の事情があった。知性も感性も豊かでありながら何かと不器用で母の理解が得られない子どもとして、8人兄弟姉妹の6番目のマーティノーが大家族の中で味わった息苦しさが推測される。

ブリストルの叔母の娘たち、すなわち、マーティノーの従姉たちの聡明さは彼女に強い印象を与え、“I still think that I never met with a family to compare with theirs for power of acquisition, or effective use of knowledge.” (93) と讃嘆している。難聴のためもあって、マーティノーは教室でよりも自学自習で多くのことを学んだ。論理学、修辞学、歴史、そして詩をたくさん読み、優秀な従姉たちのおかげもあって、新しい世界が開けたとのことである (93)。ブリストル周辺の自然の美しさにも目を開かれたのだが、ブリストルがもたらしたものはそれだけではなかった。

Far more important, however, was the growth of kindly affections in me at this time, caused by the free and full tenderness of my dear aunt Kentish, and of all my other relations then surrounding me. My heart warmed and opened, and my habitual fear began to melt away. (94)

ブリストルでの経験を総括して、“The results of the Bristol experiment were thus good on the whole.” (96) とマーティノーは言っているが、その効果の一つが“My domestic affections were regenerated.” (96) である。第1期第1節で里子に出された「小さな家」の記憶から書き始められたマーティノー『自伝』の「若い頃」(youth)の記述は、第1期第2節でニューカッスルの祖父の家への旅に触れ、そして、第2期第3節において、ブリストルの叔母の寄宿学校からノリッジの生家に戻る1819年4月の直前で一応の円環を閉じることになる。生家と外界とを移動する旅という「運動」の反復がマーティノーに少しずつ自信と自制と自立をもたらしたと言える。少なくとも、『自伝』の幼少期の記述において、マーティノーはそうのように書いている、というのが本稿における私の解釈である。

参考文献

- Birch, Dinah, ed. *The Oxford Companion to English Literature*. 7th ed. Oxford: Oxford UP, 2009.
- Franklin, Benjamin. *Autobiography and Other Writings*. Ed. Ormond Seavey. Oxford: Oxford UP, 1993.
- Hill, Michael R., and Susan Hoecker-Drysdale, eds. *Harriet Martineau: Theoretical and Methodological Perspectives*. New York: Routledge, 2003.
- Martineau, Harriet. *Harriet Martineau's Autobiography with Memorials by Maria Weston Chapman*. 3 vols. 1877. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- Mill, John Stuart. *Autobiography*. 1873. London: Penguin Books, 1989.
- Milton, John. *Complete Shorter Poems*. Ed. John Carey. London: Longman, 1968.
- Romano, Mary Ann. *Lost Sociologists Rediscovered: Jane Addams, Walter Benjamin, W.E.D. Du Bois, Harriet Martineau, Pitrim A. Sorokin, Flora Tristan, George E. Vincent, and Beatrice Webb*. New York: Edwin Mellen Press, 2002.
- Smith, Robert. *Derrida and Autobiography*. Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- Sturrock, John. *The Language of Autobiography*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- Thomas, Gillian. *Harriet Martineau*. Boston: Twayne, 1985.
- Trollope, Anthony. *An Autobiography*. 1883. Oxford: Oxford UP, 1992.